

## — 新技術立国の核となる研究大学群の在り方について —

渡部俊也（東京科学大）

### 1. 第3の研究大学群の意義について

本研究会で検討されている「国際卓越研究大学」および「J-PEAKS」に加わる第3の研究大学群の構想は、日本の産業競争力強化と研究成果の社会実装を本格的に接続する観点から、重要な政策的意義を有すると考えます。

特に、単なる研究力の高さにとどまらず、

- 産業界との継続的・戦略的な連携
- 地域経済圏との有機的な結合
- 成長性と国際性を前提とした大学経営

などを要件としていること、既存の枠組みとの差別化することができると言えます。

### 2. 「産業競争力強化に貢献する大学」の具体化に向けて

特に第3の研究大学群の中核概念である「産業競争力強化への貢献」を実際に大学が担うためには、研究成果の社会実装がリニアモデルで捉えられていた時代から、研究と同時に社会実装が進行する時代へと移行していることを踏まえる必要があります。その際、以下の三つの軸を同時に成立させる視点が重要であると考えます。

#### 物理的軸（空間）

大学が特定の広域経済圏において、産業界・自治体・研究機関と日常的に接続する「場の核」となることが求められます。

#### 時間的軸（プロセス）

社会実装を研究成果の「出口」としてのみ捉えるのではなく、研究の初期段階から産業界や投資家等が関与し、研究・投資・事業化が同時進行するエコシステムを形成することが重要です。

#### 認知的軸（分野）

全方位型の展開ではなく、各大学が自らの強みを有する分野を明確化し、国際的にも認知される研究・産業拠点として位置づける必要があります。

これら三軸が同時に成立して初めて、本大学群は「産業競争力強化の核」として機能すると考えます。

### **3. 大学経営・ガバナンスに求められる視点**

上記の役割を担うためには、従来型の大学運営を一段高めていく必要があり、以下の点が不可欠であると考えます。

- 迅速な意思決定を可能とするガバナンス体制**

学長・経営層への権限集中に加え、産業界や投資分野等の外部人材が3つの軸における活動に実質的に関与する体制が必要です。

- ファイナンスの柔軟化・可視化**

外部資金（特に産業界資金）の繰越や統合運用を可能とし、中長期的な研究投資および人材戦略を策定できる制度設計が求められます。

- 人材マネジメントの高度化**

研究者のみならず、产学連携、知的財産、事業化を担う専門人材を大学経営の中核に位置づけることが重要です。

### **4. 既存枠組み（国際卓越・J-PEAKS）との関係**

本大学群は、既存の国際卓越研究大学やJ-PEAKSと必ずしも排他的に位置づける必要はないと考えます。むしろ、将来的には

- J-PEAKSから本大学群へ発展するケース
- 本大学群が将来的に国際卓越研究大学へ移行するケース

など、動的な位置づけを許容する制度設計があるほうが、制度全体の実効性を高めると考えます。

### **5. 結語**

本大学群は、「研究力の高さ」そのものではなく、研究・産業・投資・人材が同期的に結びつくエコシステムを担う主体として定義されることが望ましいと思います。

その観点を、制度設計、評価指標、支援措置に一貫して反映させることが、今後の検討において重要なと考えます。